



異聞 蒲田行進曲

〈音楽・舞台・映画の背景とその知られざるエピソード〉

幸田 順平

〈まえがき〉

「蒲田行進曲」というタイトルは、皆さんは何を通じて記憶にあるのでしょうか。おそらく年配の方々は、戦前一世を風靡した流行歌の曲名として知っているという方もいると思います。しかし、そのタイトルは誕生から半世紀を経た一九八〇年新宿・紀伊国屋ホールを拠点とした劇作家つかこうへいの舞台上で突然世間に復活し、若者を中心に熱狂的に注目されマスコミにも取り上げられたことから、

クローズアップされるところとなります。そしてその人気を背景に昭和五七年（一九八二）つか自身の手により小説化され第八六回直木賞を受賞、広く知られるところとなりました。さらに、また翌年その原作をもとに松竹で映画化され、空前の大ヒットとなり「蒲田行進曲」というタイトルは、日本中で有名になったのです。

ここでは、「蒲田行進曲」をめぐる音楽、舞台、映画におけるそれぞれの知られざるエピソードを体験を含めて掘り起こしてみました。

〈音楽〉

かつて蒲田の地には当時最先端の設備をそなえた映画の撮影所がありました。

それまで歌舞伎や芝居を本業としていた松竹は一九二〇年映画事業に本格的に乗り出していきます。「松竹キネマ蒲田撮影所」——東京府荏原郡蒲田村にあった中村化学研究所跡地（現在のJR蒲田駅東口）約六〇〇〇坪を買い取り、その看板を掲げます。当時のハリウッドからスタッフを招き、グラスステージ等最新式の設備を備えた撮影所でした。それからから一九三六（昭和十一年）までの一六年間にサイレント映画やトーキー（音声入り）作品一二〇〇本以上が製作され、まさに当時の流行を生み出す夢工場でした。

一九二四年、城戸四郎という若き撮影所長が就任するやいなや、脚本重視、家庭的・庶民的なテーマ、さらに田中絹代や栗島すみ子という女優を主役に抜擢するなど次々と新機軸（当時こうした内容の映画は“蒲田調”と言われた）を取り入れ、瞬く間に日本中に映画ファンを増やしていきました。

そうした中で映画はトーキー（音声入り）の時代に入り、

新たに音楽の重要性に目が向けられてきました。当時撮影所の音楽部長であった堀内敬三が、アメリカの原曲をもとに蒲田撮影所記念映画「親父とその子」（監督 五所平之助）の主題歌として取り入れ、作詞した曲が「蒲田行進曲」でした。

この歌は、「暗い世相に差し掛かろうとする時代に、全盛を誇る蒲田映画への賛歌であり雄たけび」でした。（升本喜年「城戸四郎のキネマの天地」より）

その後、撮影所の所歌として長く歌い続けられるとともに、川崎豊、曾我直子歌唱によりコロンビアレコードから発売されるやいなや、全国的に大ヒット、一世を風靡しました。しかし一九三六年、松竹撮影所は事業拡大に伴って神奈川県・大船に移転、これまで数々の名作を生み出した「松竹キネマ蒲田撮影所」は蒲田の地から姿を消していく事となります。

それからおよそ半世紀を経た一九八三年、映画「蒲田行進曲」（監督・深作欣二）が大ヒット、出演した松坂慶子、風間杜夫、平田満により主題歌としてレコード化されるやリバイバルヒット、音楽「蒲田行進曲」は五〇年ぶりによりみがえりました。

映画公開からすぐにご当地メロディとしてJ R京浜東北線蒲田駅の出発のチャイムにこの曲が取り入れられていることはご存知の方も多いかと思えます。

〈舞台〉

一九七〇年代から八〇年代に掛けて、日本中の青年男女の心をわしづかみした舞台演出家がありました。つかこうへい―慶応大学在学中から詩や舞台に興味を抱き、若くして劇作家として頭角をあらわしました。一九七四年には「熱海殺人事件」で第一八回岸田賞を受賞。その後「ストリッパ―物語」「戦争で死ねなかつたお父さんのために」などを次々と発表、劇作家としての地位を不動のものとしていきます。この演出家の創作方法は独特であり、観客をどこまでも興奮とともに芝居に引き込んでいくその作風は、それまでのどんな演劇より斬新であり、印象的であると評判を呼びました。

そうした彼が一九八〇年一月に新宿紀伊国屋ホールで初演を迎えた「蒲田行進曲」は、初日をはるか前にしてチケットが完売、話題が沸騰しブームとなりました。映画の撮影所を舞台に、銀ちゃん、小夏、ヤスの三人が織りなす人間模様は感動と評判を集めました。その後3年間この「蒲田行進曲」は数十回にわたり公演されましたが、どの公演もプラチナチケットと言われ、容易に手に入らないほどの人気でした。一九八二年この内容をモチーフにした小説「蒲田行進曲」は、第八六回直木賞を受賞、つかこうへいは小説家としても踏み出していきますが、二〇一〇年惜しくも六三歳でこの世を去りました。

では、つかこうへいはなぜこの内容を「蒲田行進曲」と

いう題名にしたのでしょうか。

結論から先に言うなら、当時のつかこうへいの側近の書いた著作でも、長い付き合いの方に尋ねても真偽のほどは不明です。芝居、小説の舞台は京都太秦にある撮影所であり、蒲田の地とはあまり関係がないようにも思えます。ただこの時期創作意欲が横溢していた彼は映画の撮影所をとりまく様々な題材をオリジナルストーリーとして思い描いていたことは確かなことでした。

そんな折京都東映撮影所で、大部屋俳優の話を書くことになります。自分が師事する大スターのため命も顧みずスタントに励むといういわば「狂気に満ちた映画界」とでも言いましょうか、一見常識外れであり、およそ浮世離れた人間の中にある真実を話の中に見つけたのかもしれない。当初小説のタイトルは「銀ちゃんのこと」または「太秦ラプソディー」というのがつかこうへいがつけたタイトルでした。それがなぜ「蒲田行進曲」になったか。出版社が売れ線と考えたとか、当時「おかま」に興味を持っていた氏がそこからインスパイアされたとか諸説ありますが、わかりません。ただ、いささか牽強附会となりますが、音楽「蒲田行進曲」の歌詞にある「カメラの目に映るかりそめの恋にさえ 青春もゆる 命は踊るキネマの天地」などから連想される撮影所の独特のイメージに、つかこうへい氏が映画撮影所の始まりともいえる蒲田になにがしかの因縁を感じたのではないかと思えてなりません。

人々の共感を呼び起こす作品を生む夢工場の原点のようなものかもしれません。

「蒲田行進曲」や蒲田という地名が全国的に知られることになったのは、つかこうへいの影響が大であるといっても過言ではないように思えます。

〈映画〉

一九八二年原作者つかこうへいが直木賞を受賞したのと相まって、映画化がすすめられました。

当初プロデューサーのもとで有名俳優のキャストが決められましたが、克蘭クイン直前に原作者つか氏から注文が付きまします。舞台で主役を張った風間杜夫と平田満を起用してほしいというものでした。映画と舞台は違うものとの理解はしていた彼ではありましたが、自らが生み出した傑作の映画化にあたり、よくよく考えての事であったと想像します。

こうして映画「蒲田行進曲」は、当時「仁義なき戦い」などでヒットメーカーであった深作欣二監督の下でようやく克蘭クインします。しかしながら映画関係者とりわけ興行関係者の間ではこの作品に対する期待度は薄いものでした。それは無理ないことです、その頃の映画界は主演の俳優が誰かによって商売として期待が膨らんだそんな時代でした。いくら舞台では有名であっても全国区で勝負する映画では、舞台俳優の風間杜夫、平田満の知名度は

きわめて低いものでした。

ところが撮影が進むにつれ、現場では不思議な期待でざわついていきます。日増しに「意外とおもしろい」という声とともに他作品のスタッフなど撮影所中の見物人が増えていったのです。撮影は順調に進み、残すはラストシーン「階段落ち」のみとなりました。この階段は深作欣二監督がとりわけこだわったセットであり、この作品の肝であると考えていました。それは実際の階段を大きくデフォルメした三六段（地上一〇数メートル）もある巨大なものでした。ここを大部屋俳優がさかさまになって一気に転げ落ちる場面を、ワンカットで撮ろうというものです。危険なスタントを自ら申し出て、生まれてくる子供のためにギャラを稼ごうというこの作品のモチーフを現実の撮影でもやろうということになります。当時CGはありませんでしたから、撮影所長は監督に危険のない撮影を要請します。カットで割って、何段かづつ撮影すれば危険はありません。しかし監督はワンカット（通し）をガンとして譲りません。数日後いよいよ撮影となりました。撮影所には、救急車、看護婦がスタンバイしてものしく、現場は緊張のつぼです。（映画でも同様の状況が描かれます）「よいスタート！」の声とともに、切られた男がさかさまに一〇数メートルの階段を逆さまに転げ落ちました。「ドン！」という音とともに一瞬セットは凍り付いたような静寂。しかしすぐに落ちた俳優がむっくり起き上がり片手を上げると

スタッフ、見物人数十人から万雷の拍手が起きました。撮影現場は、画面に映し出されたシーンよりも緊張感があったといっても過言ではありませんでした。深作欣二という監督がどうしてこのシーンに固執したかは、完成した作品を見てみな理解するところとなります。娯楽映画ヒットの要素は「泣く」「笑う」「握る」だと言った人がいます。「握る」は手に汗握るです。この作品はそれらすべてがあつたといっても過言ではありませんでした。

映画は公開されるや否や興行収入のトップを行く記録的大ヒットとなり、その年の日本国内の映画賞をすべて総なめにしました。また映画界では無名同様だった風間杜夫、平田満はその後テレビ、CFに引っぱりだこになります。さらにその後発売されたビデオ（当時はパッケージ）も天文学的な売り上げを記録します

こうして「蒲田行進曲」というタイトルは全国的に著名になったわけです。